

第 2 章

山形大学教員研修会 「第 8 回 教養教育 F D 合宿セミナー」

平成 20 年度教養教育改善充実特別事業

第 8 回山形大学教養教育 F D 合宿セミナー

「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」



日 時： 平成 20 年 8 月 4 日（月）～ 6 日（水）
場 所： 山形大学蔵王山寮（電話 023-694-9669）
主 催： 山形大学教育方法等改善専門部会
山形大学高等教育研究企画センター

第 8 回 教養教育 FD 合宿セミナーパンフレット第1チームの抜粋

FD合宿セミナーに当たって

山形大学は6学部を擁する総合大学です。教養教育は、総合大学の特性を有効に活用するために全学出動体制を採っており、それは山形大学の大きな個性にもなっています。学部の垣根を越え、山形大学全体の教育を考える上で、教養教育は全ての教員の共通基盤となるものです。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実が最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あらためて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、大学への参画意識を高めるための2つのプログラムと、シラバスを作成するための2つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「教養教育を素材として、大学間・学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教養教育を始めとした教育全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは東日本地域の「FDネットワーク“つばさ”」を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されることを願っております。



第 8 回 山形大学教養教育 F D 合宿セミナー日程表

期 間 第 1 チーム：8 月 4 日（月）～5 日（火）

○第 1 日目

時 刻	項 目	担 当
12:50	山形大学集合・受付（正門付近）	事 務
13:00	送迎バス 大学出発	
14:00	会場到着 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：DR-A
14:30	アイスブレーキング	DR-B
14:50	オリエンテーション	DR-A
15:00～16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	DR-A
16:30～16:40	休憩（10 分間）	
16:40～18:10	プログラムⅡ「理想の大学をつくる」	DR-A
18:10～19:00	夕食	
19:00～21:00	入浴・休憩	
21:00～22:30	懇親会	DR-B
22:30	中締め	
23:00	就寝	

○第 2 日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅢ「科目設計 1：授業名と目標、内容の作成」	DR-B
10:00～10:10	休憩（10 分間）	
10:10～11:40	プログラムⅣ「科目設計 2：シラバスの完成」	DR-B
11:40～	修了式	DR-A
12:20～	昼食	
14:30	送迎バス 蔵王山寮出発	
16:00 頃	大学到着 解散	

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

第8回 山形大学教養教育FD合宿セミナー 班名簿

第1チーム：8月4日（月）～5日（火）

DR-A	小田 隆治
DR-B	杉原 真晃

A班：だだちゃ班			B班：萩の月班			C班：花笠班			D班：出合い班			E班：納豆班	
人文	緒方 勇		人文	伏見 和史		人文	小笠原 奈菜		人文	中島 宏		地教	水戸部 修治
工	穴戸 昌広		工	篠田 昌久		医	菊池 善彰		医	刑部 光正		高七	酒井 俊介
東女	櫻井 友子		愛東	矢藤 誠慈朗		工	檜原 浩一		工	ライムベルグ		国武	望月 好恵
群馬	相澤 省一		比治	長谷川 祐介		信州	松岡 幸司		茨医	坪井 章雄		宮誠	尾形 陸郎
鶴専	飯島 政雄		宮誠	佐々木 勝男		北薬	渡辺 泰裕		東女	兼平 拓道		千葉	前田 早苗
兵庫	金子 哲		仙台	後藤 満枝		近畿	神田 宏		北教	森田 みゆき		筑波	谷 貴幸
関外	並松 善秋		北教	島山 大		群馬	柳川 益美		関外	岡澤 潤次			

A班：チーム21班			B班：がんばんべー班		
地教	佐久間 雅		地教	和田 直人	
工	神保 雄次		理	佐々木 実	
農	笹沼 恒男		EM	福島 真司	
千明	箆 光夫		長崎	岡田 佳子	
県広	松尾 知晶		近豊	堀 和弘	
仙台	鎌田 幸雄		宮誠	小野 賢一	
大体	上谷 浩一		産技	志田 長	

人文：人文学部 地教：地域教育文化学部 理：理学部 医：医学部 工：工学部 農：農学部 高七：高等教育研究企画センター
 EM：エンロールメント・マネジメント室 産技：山形県立産業技術短期大学校 信州：信州大学 北薬：北海道薬科大学 近豊：近畿大学豊岡短期大学
 茨医：茨城県立医療大学 国武：国際武道大学 近畿：近畿大学 長崎：長崎大学 東女：東北女子短期大学 愛東：愛知東邦大学 千明：千葉明德短期大学
 比治：比治山大学 県広：県立広島大学 群馬：群馬大学 宮誠：宮城誠真短期大学 千葉：千葉大学 仙台：仙台大学 鶴専：鶴岡工業高等専門学校
 北教：北海道教育大学 大体：大阪体育大学 兵庫：兵庫大学 筑技：筑波技術大学 関外：関西外国語大学

オリエンテーション

(担当：DR-A)

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学生の質の変化への対応

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け
- ② 教育の基本的構成要素，大学における各科目の存在意義，授業設計，成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで，セミナー自体がグループ学習形式であり，参加者は，学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：7班
班の構成員の年齢は幅広くする。
- ③ 各プログラムに，毎回，総合司会者と記録係を置く。(各班の持ち回り)
- ④ 各班に，毎回，司会者と記録係，発表者を置く。(持ち回り)
- ⑤ 全体と各班の記録係は，各プログラム終了後に記録を提出(この記録は，コピーした後，速やかに全班に配付)
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で，各参加者が各班の発表と質疑応答に対し，5段階で評価を与える。(この評価は，毎回回収し，整理した後，速やかに掲示する。)
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ○各プログラムの講師による作業内容の説明 | 10分 |
| ○グループ作業 | 40分 |
| ○発表 各グループ
(各グループの発表時間3分×7班) | 21分 |
| ○全体討論 | 19分 |

全体で 90分

平成 20 年度 第 8 回山形大学教養教育 F D 合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

セミナーの形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② 班構成：7 班 班の構成員の年齢は幅広くする。班は、参加者を見て、当日までに専門部会で決定しておく。
- ③ 各セミナーに、毎回、司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に、毎回、司会者、記録係及び発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 各プログラムの基本的構成
 - 各プログラムを担当する講師による作業内容の説明 10 分
 - 班ごとの作業 40 分
 - 発表 各班の発表時間 3 分×7 班 21 分
 - 全体討論 19 分
- ⑥ 全体と各班の記録係は、A 4 版 1 枚程度に記録をまとめ、各プログラム終了後に提出する。（この記録は、コピーした後、速やかに参加者全員に配布）
- ⑦ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表（各 4 分で計 20 分）と質疑応答に対して評価する。5 段階評価とし個人は 21 点の持ち点を有する。（この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに全班に配布）

プログラムⅠ 「大学へのニーズと課題」

各班同じテーマ 次のプログラムも念頭に置く。

- 大学の分析
 - ・大学の置かれている状況分析
 - ・社会的ニーズ
 - ・長所（望まれること）
 - ・短所（望まれないこと）
 - ・現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラムⅡ 「理想の大学をつくる」

プログラムⅠの問題点等を踏まえた上で、理想の大学をためには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。

大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標、大学の「個性」と「売り」をどうするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められる。

- ① 理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- ② 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- ③ 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書等）
 - ・その宣伝・普及の方法（4 年計画案）
- ④ 評価（測定方法、学生、教員、ステークホルダー）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する。

プログラムⅢ「科目設計 1：授業名と目標、内容の作成」

各授業に分かれ、以下の指定された授業において適当な科目を作り、その科目名（名は体を表す科目名）とその学習目標を明らかにする。履修の時期も明確にする。

- A, B 班：大学の個性を発揮する授業
- C, D 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- E 班：国際性を培う授業
- F 班：21 世紀の諸課題に対応する授業
- G 班：職業意識と労働意欲を培う授業

学習方略

授業内容（順次性を踏まえて設計）

授業の方法（講義、ビデオ、見学、調査、討論、担当教員等）

つづいて、授業内容を設計する。原則として、週に 1 回 90 分授業を 15 回実施するとして、15 回分の授業内容（方略）を設計する。授業の順序と各回の内容、授業法、媒体、資源などを現実的に示す。方略を設計するに当たり、目標の修正が必要になるかもしれない。この場合は、目標を手直しする。

プログラムⅣ「科目設計 2：シラバスの完成」

「科目設計 1」で設計した授業内容を手直しし、「評価」の項を加え、シラバスを完成させる。

成績評価

評価項目

評価方法

評価比重（%）

各グループの課題

○プログラムⅠ

グループ	課題
共通	大学へのニーズと課題

○プログラムⅡ

グループ	課題
共通	理想の大学をつくる

○プログラムⅢ～Ⅳ

グループ	課題
A, B 班	大学の個性を発揮する授業
C, D 班	地域性と関連する授業：大学と地域の連携
E 班	国際性を培う授業
F 班	21 世紀の諸課題に対応する授業
G 班	職業意識と労働意欲を培う授業

プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」

(担当：DR-A)

○各班同じテーマ プログラムⅡも念頭に置く。
現実的、具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには、どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所（望まれていること）
 - ・短所（望まれていないこと）
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラムⅡ「理想の大学をつくる」

(担当：DR-A)

プログラムⅠの問題点などを踏まえた上で、理想の大学をつくるためには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的な行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（4年計画案）
 - ・組織論（学部、学生の入口と出口（入試制度と就職）、学長と副学長制、委員会など）
- 4 評価（測定方法、学生、教員、ステークホルダー）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する

プログラムⅢ「科目設計 1：授業名と目標，内容の作成」

(担当：DR-B)

ここでの課題

シラバス作成作業の第 1 段階として，各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ，Ⅳの各グループの課題

- A，B 班：大学の個性を発揮する授業
- C，D 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- E 班：国際性を培う授業
- F 班：21 世紀の諸課題に対応する授業
- G 班：職業意識と労働意欲を培う授業

学習方法と道筋（戦略，学習方略）を明示する。具体的には，学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の，種類と順序を示す。

作業 1 授業名の決定：○○○○○○○○○○（仮称）←内容確定後，最後に決定？

作業 2 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく，学生による学習を中心に考える（教員の果たすべき役割の再検討）
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
- (3) 大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

- 講義の提供 → 学習方法と教育方法のデザイナー
- 学生から独立 → 教員と学生を一つのチームと考える
- 学力差を明確にする → すべての学生の能力と才能を引き出す

成功へ向けて

- 伝授する資源の重視 → 学習と学生の成功の産物を重視
- 資源の量と質の重視 → 産物の量と質を重視
- 入学生の質の重視 → 卒業生の質を重視
- カリキュラムの発展と拡大 → 学習技法の発展と拡大
- 大学の質・内容の質 → 学生の学習の質

使命

- 知識の提供・伝授 → 学習を生み出し，知識の発見と形成へ
- コース・プログラムの提供 → 強力な学習環境の提供
- 教育の質の改善 → 学習の質の改善
- 多様な学生への対応 → 多様な学生を卒業させる

教育

- 教員中心・知識伝授 → 学生中心・知識発見
- 教育の質 → 学習の質，学習効果・効率
- 指導者としての教員 → 学生の才能・能力を引き出す助言者
- 個人的・受動的学習 → 共同的・行動的・能動的学習

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は、教育の受け手（学習の主体）である学生の変容で評価されるべきである。そのために、①授業の目標と②到達目標を定める。

註：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る，認識する，理解する，感ずる，判断する，評価する，考察する，位置付ける，実施する，適用する，示す，創造する，身に付ける，等々
※単純な行動を示す動詞は用いない（述べる，列挙する，選ぶ，記載する等々）
- (3) 必要な目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含める。

註：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか、具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく、観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知，態度，技能を分けて書く
 - 知識（認知領域）：知識を得て理解し，一定の能力を獲得する
述べる，説明する，分類する，比較する，解釈する，推論する，一般化する，適用する，結論する，批判する，評価する，等々の動詞
 - 技能（精神運動領域）：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる，始める，模倣する，工夫する，行う，創造する，触れる，調べる，準備する，測定する，等々の動詞
 - 態度・習慣（情意領域）：獲得した知識・能力を，情報として相互に提供・交換し合う
行う，コミュニケーションする，協調する，示す，表現する，系統立てる，参加する，応える，等々の動詞

作業 3

原則として、週に1回90分の授業を15回実施するものとして、授業の内容を考えてみる。その際、授業の順序と各回の内容、学習法、利用する媒体、資源などについて明示する。内容によっては、授業の目標、到達目標、さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議（演習，セミナー，ディベートなど）
②実験・実習
③自習（読書，個人研究，コンピュータ活用学習など）

註：学習のための資源

(1) 人的な面で：

(2) 物的な面で：①場所

②媒体（スライド，OHP，標本，VTRなど）

(3) 予算

プログラムⅣ「科目設計 2 : シラバスの完成」

(担当 : DR-B)

ここでの課題

プログラムⅢで作成した授業について、シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は、学生、教員、カリキュラム（目標、学習方法の立案（方略）、評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は、その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
- ① 知識（認知領域）
 - ② 技能（精神運動領域）
 - ③ 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
- ① 学習前（プレテスト）
 - ② 学習中（中間テスト）
 - ③ 学習終了後（ポストテスト）
 - ④ フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
- ① 形成的評価：学生が理解している点、理解が不足している点を発見し、学習法、教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
 - ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに評価するか、複数の評価項目のウェイト
- ① 論述試験
 - ② 口頭試験
 - ③ 客観試験
 - ④ 実地試験
 - ⑤ 観察試験
 - ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようと意図する項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても、同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ、そういう解答がなされたか分かるか？

各プログラムの記録【第 1 チーム】

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

◆ グループ作業記録

ただちゃ 班

司会者 緒方 勇
記録者 並松 善秋
発表者 相沢 省一

- 議論のためのレベル設定（普通レベルを想定する）
- 現状…少子化に伴う問題（受験生減少）
 - 大都市，大規模校への集中傾向
 - 大学予算減
 - 大学経営力量の差—授業料への格差
- 社会は大学に何を求めているか
 - コミュニケーション能力の要求が出されている。
 - 資格を超えて，基礎学力が求められている。
(離職率の増加)
 - 大学の中で専門的知識・技能を身につけた人物を要求されている。
- 学生のニーズ…把握することが困難
 - 努力・好奇心を最少化する傾向
- 大学に望まれること…リベラルアーツ科目の重視が必要
 - 教員が学生に学問を提示する
 - 自学自習の姿勢を身につけさせる
- 世間の風潮への極度の迎合姿勢(安易さ，安楽優先，ビジネス論理が教育の中へ)
- 改革の必要性
 - 基礎学力の補充（入門科目 数学・物理）
 - 教養教育の充実
 - 制約・問題点 時間的
 予算的

萩の月 班

司会者 長谷川祐介
記録者 畠山 大
発表者 篠田 昌久

話の前提

- バーチャルな大学
- ・ 私立 ・ 山形市 ・ 偏差値 中の下
 - ・ 経営学部と福祉学部
 - ・ 学生：2,000人

1, 大学に何が求められているか?

- ・ 人材育成
 - ・ 地域の活性化
- ↑ 学習機会
居場所
↓ 地域の人々
- 学生の ↗

2, 大学の置かれている状況分析

- ・ 学生確保
 - ・ 地域における存在感
- 発信の必要性
- 長所：実務レベルの力量
- 短所：実務が出来ない
- 人間関係がとれない
- 知識のバランスがない

3, 現実的な制約

- ・ 学生の能力
- ・ 自己肯定感が低い



花笠 班

司会者 松岡 幸司
記録者 小笠原奈菜
発表者 渡辺 泰裕

定義 中堅地方大学

- ・ 文・理 数学部
- ・ 地方出身者
- ・ 就職も地元

1, 大学に何が求められているか?

学生のニーズ → 資格（学士，修士など）
ニーズ自体が不存在？

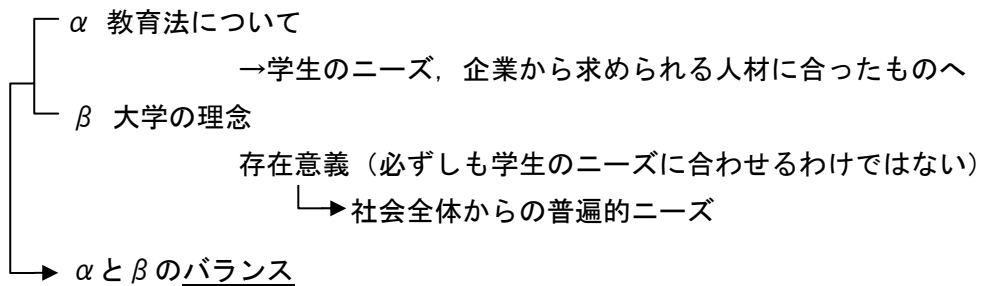
社会

- ①人材育成：卒業生の質の保証（企業に対する）
- ②地域の存在：市民大学，公開講座など

2, 大学の置かれている状況分析

- ・ 卒業生の質の保証 → 人材不足
- ・ 教養教育と専門教育との関連

3, 改革の必要性



出会い 班

司会者 中島 広

記録者 刑部 光正

発表者 三浦 弘太郎

1) 問題点

- a) 学生のニーズ 資格の取得
能力の取得 } → 専門学校で十分
- b) 社会のニーズ 知識, 人間性(積極性, コミュニケーション能力等)を身につけさせる

2) 大学の置かれている状況

- ① 1) - a), b) 間のズレ
- ② 知識の教育に片寄っていた可能性
- ③ ②を重視(試験をむずかしくすると学生の人気なくなる)

3) 新しい大学を設定

目的・目標

- 1) 専門性, 知識, 応用力, 想像力を身につけさせる
- 2) 人間性の向上
- 3) Only oneと誇れるものを設置



納豆 班

司会者 前田 早苗
記録者 望月 好恵
発表者 前田 早苗

1, 大学には何が求められているか?

(問題) 大学側と社会（企業）側の意識のズレ

(例) Jabee : 学校が努力した成果を企業が知らないことが多い
社会（企業）のニーズは短期間に変化している
→ 悩む力のある学生

↑ 1に含まれる

2, 大学の置かれている状況分析

3, 問題点

短所 : 大学の教員は組織的に動くのが苦手

- ・意思決定が遅い
- ・それぞれが違う方を見ている

改革の必要性 : 学生を中心に!!

現在のピンチが
組織改革・意識改革の
チャンス!

チーム21 班

司会者 佐久間 雅
記録者 神保 雄次
発表者 笹沼 恒男

1, 大学には何が求められているか?

地方大 総合大学

・ 社会は大学に何を求めているか

地域貢献, 経済効果, 人材

・ 学生のニーズ

（社会人としての常識
資格
入学しやすさ

・ 企業が求める人材

1. コミュニケーション力
2. チャレンジ精神
3. 協調性
4. 主体性

2, 大学の置かれている状況分析

- ・ 課題→学生のニーズが多すぎる→学生の希望をすべて受け入れるのは困難
(学生の数だけ)
- ・ 長所: 大学でしか学べないことを学ぶ
- ・ 短所: 「学問の意義」が伝えられていない→学生に主体性を持たせる授業
- ・ 理由, 原因

3, 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

金銭面, スタッフ不足か

マンツーマンの講義



がんばんべー 班

司会者 和田 直人
記録者 佐々木 実
発表者 福島 真司

4 年制大学・短期大学・専門学校の中で、いろいろと大変な状況にある短期大学（短大）に焦点をしぼる。短期大学の中で、地方の私立大学について検討する。（教養系）

- (1) 短大は 4 年制大学と専門学校の中間的な位置づけである。
- (2) 生徒数がどんどん減っている中で、短大は厳しい状況である。

1, 大学には何が求められているか？

- a) 社会が大学に求めていること：上記（1）
- b) 学生のニーズ：① 4 年は勉強したくない、② 早く 社会に出たい

2, 大学の置かれている状況分析

- a) 課題：2 年間で社会に通用する人材を育てないといけない
- b) 長所：① 資格が求められている
② 専門的教育が重点的にできる
③ 学費が 2 年分
- c) 短所：教養教育がほとんどできない
- d) 理由・原因：企業としては、若くて、給料が安くて働いてもらえる

3, 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

制約：2 年間で教育しなくてはならない（教養教育ができない）

問題点：教養教育ができない

改革の必要性：① 短大ごとの独自性をどう出すか

（何を身につけさせるか）

② 補助金制度（定員割れ→補助金カットをやめてほしい）

全体会記録

総合司会者 緒方 勇
記録者 櫻井 友子

○企業が求めているのは、どういう学力か。

- ・自主的に動ける力
- ・自学自習できる能力

→このような能力がどのようにしたらつくのか。

○授業のやり方を工夫する。

学生自身に考えさせる授業を取り入れていく。

(人間力を高めさせるため)

教養教育には {

- ・基礎知識をつけさせる
- ・人間力を高めさせる

という二面性がある。



プログラムII 「理想の大学をつくる」

◆ グループ作業記録

ただちゃ 班

司会者 並松 善秋
記録者 金子 哲
発表者 並松 善秋

地方中堅都市 1000/年

理工◎
法経

☆ ディプロマ

- ・ 自学自習 ←
- ・ 論理思考
- ・ 高い言語能力

言語能力

法社会に対応可能な能力
組織マネジメント能力

↓
をプラス

}
萌芽的にしろ

☆ カリキュラム

- ・ オードックスなものに

☆ アドミッション

- ・ 全国・全世界的に飛躍する元気のある学生

☆ ネーミング

- ・ 室町工科大学 (MIT)

☆ キャッチ

- ・ 技術と経営をブリッジする。

☆ 評価

- ・ カリキュラム, 特に必修部分の厳密な評価

萩の月 班

司会者 矢藤誠慈朗
記録者 伏見 和史
発表者 佐々木勝男

大学名 : やまがた萩の月 **学部** : 経営／福祉／工学
立地場所 : 山形市 **学生数** : 2000人

1, **理念・目標** ⇒ 下克上の思考
旧体質から新たな体質の体制への変換を図る

2, **方略** : 福祉工科ビジネス
＋スポーツ／ボランティア etc

3, **計画** :

福祉 地域の福祉向上のためのシステムの創造と構築

工 福祉機器の新規開発
知的財産権の取得

経営 福祉事業のベンチャーの立ち上げ, 経営

入試 → リベラルアーツ型で入学, 2年次配分

カリキュラム → 専門課程での共同作業

出口 → グローバルなネットワーキング能力

4, 上記の実行内容により検証・評価

花 笠 班

司会者 神田 宏
記録者 榎原 浩一
発表者 菊池 善彰

- 大学名 「べにばな大学」
- 学部 商経／理工／法／社会
- 立地 山形市
- 学生数 3000人

1, 理念・・・・・・・・「地元貢献する知の中心を希求する」

・目標

地域に育ち，地域を知り，地域に貢献する人材育成行う

・キャッチフレーズ

「山形発山形行き」

2, 3, 方略・・・・・・・・「商経学部について」

D. P.

- (1) 学生が地域の実態を把握している
- (2) 学生が地域の社会環境を把握している
- (3) 学生が経済活性化に資する潜在力を備える
- (4) 学生が地域の域外発展に資する潜在力を備える

C. P. 「丸ごとやまがた」

- ・地域密着型のカリキュラム編成

(e. g. 地域経済システム論，地域体験講座，インターン等)

A. P. やまがたを愛する学生を優遇する

- ・AO入試をはじめとして，学力よりも優先する

4, 評価

- ・外部評価の導入

出 会 い 班

司会者 坪井 章雄
 記録者 兼平 拓道
 発表者 森田みゆき

- (1) 大学名 ソニー山形大学 (設立母体 ソニーなどの企業集合体)
 (2) 場所 新庄 (一括)
 (3) 学部 6 学部
 (4) 学生数 4, 000 名 (全寮制)
 (5) 3つのポリシー (工学部を想定)

- ①ディプロマポリシー 1) 生活力 (挨拶, 時間を守る)
 2) 人間力 (コミュニケーション, 協調性, 主体性)
 3) 実践的専門性 (応用力)

- ②カリキュラムポリシー 1) 生活力・人間力 1年～4年次 (段階的に)

{ インターンシップや実習などを活用する } 教室から社会へ教室から世界へ

- 2) 実践的専門性 3年～4年次 (専門性)

- ③アドミッションポリシー

センター試験を活用しながらも, 幅広く世界に人材を求める

- ④評価

学生評価, 地域評価, 企業評価



納豆班

司会者 谷 貴幸
記録者 水戸部修治
発表者 谷 貴幸

1 理念・目標

知的な

ねばり強さ

- 確かな基礎学力
- 資格取得
- 大学院への進学も

やさしく・元気・ねばり

東北コミュニケーション大学

教育学部

工学部

看護福祉学部

収容定員 800名

所在地 山形県酒田市

2 方略

(1) 地方病院との連帯

4 評価

(1) 就職先からの情報
(2) 教員も出向いて把握

3 実行計画

- (1) ディプロマポリシー
- ① 学生が患者の自立・自律を強く支援できる。
 - ② 資格の確実な取得
- (2) カリキュラムポリシー
- ① 病院への実習（現場第一）
 - ② 他学部との交流
- (3) アドミッションポリシー
- ① 資格取得だけを目指すのではない 適正重視

チーム21 班

司会者 箆 光夫
記録者 松尾 千晶
発表者 鎌田 幸雄

1, 大学の理念・目標

大学名：ひとづくり大学
立地場所：山形，小白川
人数：300名
学部：理学系，人文系，教養学部

リーダーを育成
ノブレス・オブリージュ
を厳しく鍛える子

↓
アカデミックポジションを求める + ゼネラリスト育成
スペシャリスト育成

2, 3, 実行計画

- ・ 授業料を心配しなくてよい（安価，大学が地域ファンドを募り，貸付）
- ・ 全寮制：生活と学問に集中する環境を
- ・ 学生募集：教員がまめに高校を回る＋学生に母校訪問させる，先輩の口コミ
- ・ 4年間にこだわらない，5年でも6年でも学生が考える

アドミッションポリシー AO面接 → リーダーを志す

カリキュラムポリシー マンツーマンシステム

ディプロマポリシー スペシャリスト
ゼネラリスト

粘り強く学問研究
チャレンジ精神
解析（アナリシス）
総合
常識を知った上で，非常識を考える

Guess と Insight

↓
もみ合う
学生主体の講義

がんばんべー 班

司会者 岡田 佳子
記録者 志田 長
発表者 堀 和弘

1, 大学の理念・目標

- ・ 国際感覚
- ・ 地域に根付く

大学名「小樽国際短期大学」

2, 方略

3, 実行計画

入試 オープンアドミッション
大学の理念に共感する人

募集 全国

学長 地域の有力団体の長（例：経済同友会）
地域の企業との太いパイプを持つ

教官 教官の国際性
現場で活躍できる
教官の海外研修（留学生の確保も）

学生 授業にプロジェクト性を持たせ、ゼミ形式で通年 2 年行う… 1, 2 割を留学生
学生に企業を作らせ、運営させる
ロシア、中国を対象として、観光、交渉
問題に関わることで解決能力

地域企業 観光と地域活性化（観光売り場の改善）
企業のバックアップ

- ・ 地域での問題を見据えて
- ・ 最後までやりぬく力
- ・ 人間関係力を作る

4, 評価

インターンシップ先からの評価

全体会記録

総合司会者 後藤 満枝
記録者 長谷川雄介

「理想の大学をつくる」

B：萩の月班：下克上とは何か？

→既存の概念を変えていく。

C：花笠班：山形を愛する度合いをどうはかるか？

→面接などで行う。

D：出会い班：新庄市でどうインターンシップを行うか？

→ソニー（想定を前提）を中心に行う。

E/F：納豆／チーム 2 1 班：教員が出向いて説明するとしても高校にとっては迷惑では？

→E：高校には行かない。（実習先を想定）

→F：在学生が母校に出向く。（単位認定も行う）

F：チーム 2 1 班：授業料をファンドでまかなう方法は？

→今後の課題としたい。

C：花笠班：学生をすべて山形に就職は可能か？

→農業系も想定して、山形県で 120 万人いる。



プログラムⅢ 「科目設計1:授業名と目標, 内容の作成」

◆ グループ作業記録

だだちゃ 班

司会者 飯島 政雄
記録者 穴戸 昌弘
発表者 飯島 政雄

授業名：「技術と経営」

学習目標：市場調査, 製品の開発, 製造, 販売の一連のプロセスすべてに渡ってマネジメントできる能力を身に付ける

到達目標：起案書が作成できる
(計画書)

講義 1～2：市場調査と分析
3～4：開発と知財
5～6：製造プロセス（生産工学）
7～8：社内コミュニケーションとマーケティング
9～13：グループによる計画書作成
14～15：発表

萩の月 班

司会者 畠山 大
記録者 篠田 昌久
発表者 矢藤誠慈朗

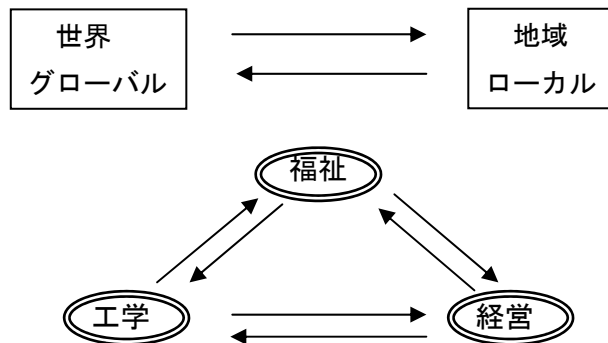
課題 大学の個性を発揮する授業

作業 1 授業名：

福祉工学マネジメント
— ライフエンジニアリング 2 1 —

福祉・工学・経営の学部横断的・融合的な授業

作業 2 ①授業の目標



福祉：福祉問題解決のシステム化

工学：機器の開発，特許

経営：ベンチャー立ち上げ

ビジネスモデルの提案

ファンドの設立

作業 3 グループワーキング（2 + 2 + 2 人 = 6 人）

グループ同士で競わせる

最終成果

カンファレンスで学外にも公開

w e b で公表

自己評価，相互評価，外部評価

花笠 班

司会者 柳川 益美

記録者 神田 宏

発表者 小笠原奈菜

※前提：（^{べにはな}紅花）大学 商経学部（200人規模）

「地域への貢献」⇒生活・文化を基盤にして地域を豊かに。

ここでは「健康」をキーワードに〔消費・活力・生産性〕

そのために地域の実態の把握〔フィールド調査〕

科目名 「山形と健康」（「まるごと山形」パッケージ）

学習目標作成に向けて

「まるごと山形」パッケージの1科目に位置づける。

←視点は「地域と健康」

外に出て体験学習＋実態調査を視野に入れる。

⇔ 課題発見の手助けが必要〔例 TAなど〕

学習目標：地域の健康；地域企業の健康への取り組みを知る

到達目標：フィールドワーク；フィールド調査の手法を学ぶ

学習方法作成に向けて

15名程度のグループで作業

さらに1グループを5名程度のワークグループに

ポスターセッションなども採り入れる

6回：概論（外部講師（例）商工会議所など）もまじえてコメントも付ける）



6回：フィールド調査



3回：報告・評価

出会い 班

司会者 岡澤 潤次
記録者 中島 宏
発表者 刑部 光正

授業名：「グローバル企業演習」 (工学部：3年対象
1クラス40人)

<産業基盤の弱い新庄でこそ、新しい産業を興すことのできる企業力を養う>

- 1) 状況分析 (地域研究を講義形式)
 - ケーススタディ (地方はなぜ地盤沈下したのか?)
 - 地域の分析から、日本・世界の分析へと発展
- 2) 企業プロジェクトのグループワーク
 - ソニー系列企業等の見学+市場調査
- 3) プレゼンテーション+評価
 - 地域銀行やソニーの人の前でプレゼン、評価してもらう

<学習目標>

- 1) 地域分析の方法論を理解する
- 2) 市場調査を実施する～実践的な分析能力を身につける
- 3) 企画を見きわめ、アピールする力を身につける

<授業時間の配分>

- 1) 現状分析 5コマ
- 2) グループワーク 5コマ (企業訪問2コマ+市場調査3コマ)
- 3) プレゼン+評価 5コマ (プレゼン3コマ+評価2コマ)

納豆 班

司会者 尾形 睦郎
記録者 酒井 俊典
発表者 尾形 睦郎

〈東北コミュニケーション大学〉

構成

①教育学部②工学部③看護・福祉学部→3学部が共通して取り組む問題

授業名

多文化コミュニケーションから見た
看護・福祉の課題にいどむ

学習目標

←現実に根ざした問題

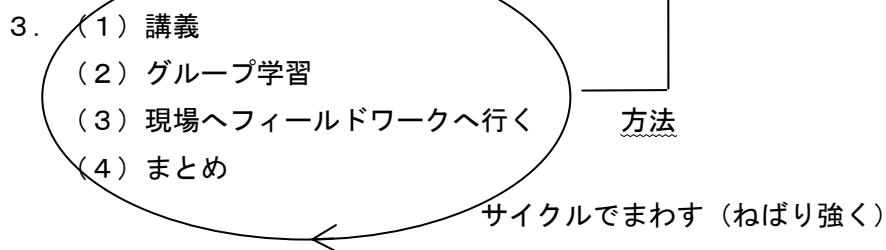
- ・ 国外からやってきた人材と円滑に組織運営が出来る
ex. フィリピン等 コーディネーター
- ・ ナース、ケアマネジャーの語学取得
- ・ 同じ職場で価値観の違い（≒コミュニケーション）
異なるバックグラウンド

→ 看護・福祉の現場の課題を通じて、国際的な価値観の違いを踏まえ問題

※シラバス作成時に、3学部共通して取り組める課題を設定し、グループで解決できるようにする

到達目標

価値観の詳細な中身を①現状の分析をする②要因の分類整理
③対応策の企画立案をする



15回→具体的なフィールド課題を3つ設定し、5回×3のサイクルをまわす

詳細はIVで

全体会記録

総司会者 渡辺 泰裕
記録者 榎原 浩一

萩の月班へ：“到達目標が見えないが……”

⇒コミュニケーション／プレゼンテーション能力
NW構築

“一般的に過ぎないか？”

⇒卒業研究であって4年間の達成度を評価するものである

“卒研とすると学部横断の意味は何か？”

⇒3学部構成の大学であって、福祉に関するブレークスルーが目的である。
もともとの各学部のミッションは、最終的な融合によって初めて達成される。
その結果の外部評価、権利化が目的である。

チーム21へ：“目標と講義内容に関連がみられない”

⇒事実認定とその分析の主体的取り組み、そして、その発信を目的としている。
解決策は明確に本来ならないが、体験する価値は十分と考える。
又、学生自身が折にふれてプレゼンを行う、その際のディベートは、ことに有意義である。

“学生への負担が大である。年次を考えて欲しい”

⇒1年次からである。AO入試等で適性をみた学生を育成する。

●各チームの想定

A：50～60名

B：100×5クラス

C：(15×7×2)グループ

D：40×2クラス

E：1年生50名

F：1年生前期100名

(6×16の程度)

G：1年後期100名

(10×10の程度)

プログラムⅣ 「科目設計2:シラバスの完成」

◆ グループ作業記録

だだちゃ班

授業科目名『Management and Technology』（技術と経営） 担当教員： 担当教員の所属：緒方 勇 開講学年：2年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：講義 開講対象：工学部 科目区分：経営工学	
【授業概要】 ・テーマ 技術と経営 ・ねらい 市場調査、製品の開発、製造、販売の一連のプロセスすべてに渡ってマネジメントできる能力を身に付ける。 ・目標 製品の開発・製造・販売計画の立案、実行が出来る。 ・キーワード MOT	
【授業計画】 ・授業の方法 前半は主として講義を行う。その後、インターンシップ、後半は講義・インターンシップの内容を踏まえてグループ討議により、実際に製品開発・製造販売計画を立案し発表する。 ・日 程 1～2回 市場調査と分析 3～4回 製品、技術開発と知的財産マネジメント 5～6回 製造プロセス 7～8回 社内コミュニケーションとマーケティング 9～11回 企業インターンシップ 12～14回 グループワーク（製品計画の立案）発表 15回 試験	
【学習の方法】 ・受講のあり方 知識を身に付け、実際に活用できる ・予習のあり方 経済・経営についての興味を持つこと ・復習のあり方 講義・演習の内容を整理すること	
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 試験（40）、インターンシップレポート（30）、グループワーク（30） ・方法 ペーパーテスト、レポート、プレゼンテーション	
【テキスト】 緒方 勇 『技術と経営』、2008年11月、9570円 さくらんぼ通信社	
【参考書】	
【科目の位置付け】 「知的財産権論」、「社会実践法学」、「人間行動論」、「マーケティングリサーチ論」	
【その他】 ・学生へのメッセージ オヤジカラオケは大切です。 ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野	

花笠 班

授業科目名 まるごと山形パック『山形と健康Ⅰ』 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年：1 年 開講学期：前期 単位数：2 開講形態： 開講対象：商経学部 科目区分：総合	
【授業概要】 ・テーマ 「まるごと山形」パッケージの 1 科目 ・ねらい 地域の健康・地域の企業の健康への取組みを把握する ・目標 フィールド調査が出来るようになる ・キーワード プレゼンテーションが出来る	
【授業計画】 ・授業の方法 講義（外部講師も） フィールド調査（小グループ制） ・日 程 1 回 パックの中における位置付け 2～3 回 健康一般 4～5 回 山形と健康『外部講師』 形 6～7 回 フィールドワーク概論 8 回 フィールドワーク準備① 形 9 回 フィールドワーク準備② 10 回 フィールドワーク 11 回 小グループによる報告 形 12 回 フィールドワークまとめ 13 回 プレゼンテーション 14 回 ポスターセッション 15 回 論述試験 <div style="text-align: right;">形=形成的評価，ポートフォリオへ併用</div>	
【学習の方法】 ・受講のあり方 ・予習のあり方 ・復習のあり方	
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 地域の健康について把握しているかどうか フィールド調査が出来ているかどうか プレゼンテーションが出来ているかどうか ・方法 プレゼンテーション 2.5 点，ポスターセッション 2.5 点，論述試験 5.0 点	
【テキスト】 特に設けない	
【参考書】	
【科目の位置付け】	
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野	

出会い 班

授業科目名『グローバル起業演習』 (Practical Local and Global Enterprising) 担当教員： 担当教員の所属：工学部 開講学年：3年 開講学期：後期 単位数：2 開講形態：演習 開講対象：工学部学生 科目区分：専門科目										
【授業概要】 ・テーマ 地域から世界に通用する起業家の育成 ・ねらい <ol style="list-style-type: none"> 1) 現状分析 <ul style="list-style-type: none"> ・ケーススタディ ・地域の分析から日本世界の分析へと発展 2) 起業プロジェクトのグループワーク <ul style="list-style-type: none"> ・ソニー系列企業の見学と市調査 3) プレゼンテーションと評価 ・目標 <ol style="list-style-type: none"> 1) 地域分析の方法論を理解する 2) 市場調査の実施を調査する（実践的な分析能力を身に付ける） 3) 企業企画の見きわめの、アピールする力を身に付ける ・キーワード 地域分析，市場調査，企業企画										
【授業計画】 ・授業の方法 <ol style="list-style-type: none"> 1) 講義方式 2) フィールドワーク 3) 実習 ・日 程 <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②地域分析論 ③世界の中の日本と山形 ④ケーススタディ（成功論） ⑤ケーススタディ（失敗例） ⑥企業訪問Ⅰ ⑦企業訪問Ⅰの分析 ⑧企業訪問Ⅱ ⑨企業訪問Ⅱの分析 ⑩分析の発表 ⑪企業設立の起案書の作成方法とプレゼン方法 ⑫各グループのプレゼン評価 ⑬同上 ⑭同上 ⑮同上 										
【学習の方法】 ・受講のあり方 私語厳禁，企業に迷惑をかけない，積極性を持って参加 ・予習のあり方 経済情報の収集に日ごろから努める ・復習のあり方 他グループの発表を次の自グループの発表に役立てる										
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 20%;">20点</td> <td>ミニテスト（4回）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>30点</td> <td>分析発表</td> <td></td> </tr> <tr> <td>50点</td> <td>企画発表</td> <td style="text-align: right;">★60以上から合格</td> </tr> </table> ・方法 <p>ミニテスト：講義（2回～5回）の初めの15分に知識を問うテスト 分析発表：10回目 各グループによる相互評価 企画発表：12～15回目は毎日企画発表を各グループによる相互評価</p>		20点	ミニテスト（4回）		30点	分析発表		50点	企画発表	★60以上から合格
20点	ミニテスト（4回）									
30点	分析発表									
50点	企画発表	★60以上から合格								
【テキスト】 なし：必要な書類は毎回配布										
【参考書】 前年度の発表内容をWeb上で見ること										
【科目の位置付け】 総合領域										
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野										

納豆班

授業科目名『多文化コミュニケーションから見た看護・福祉の課題に挑む』 (Challenge Multicultural Communication Problems in the Field of Nursing and Welfare) 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年：1 年 開講学期：後期 単位数：2 単位 開講形態：講義・実習 開講対象：全学部(教・工・看護) 科目区分：教養
【授業概要】 ・テーマ 多文化コミュニケーションの観点から看護・福祉が直面する実際的課題について検討する。 ・ねらい 看護・福祉の現場の課題を通じて、国際的な価値観の違いを認識した上で、その問題を解決する。 ・目標 多様な価値観について ①現状の分析をする。 ②要因を分類・整理する。 ③対応策を企画立案する。 ・キーワード 多文化, 看護, 福祉, ケア, フィールドワーク
【授業計画】 ・授業の方法 (1) 講義：映像資料, ゲストティチャーからの情報提供等により課題をつかむ。 (2) グループワーク：課題に対して情報収集し, フィールドワークのより詳細な見通し(仮説)を立てる。 (3) フィールドワーク：現実の諸課題に触れる。 (4) グループワーク：フィールドワークから持ち帰った情報(ギャップ)を整理する。 (5) 全体協議：各グループの分析を報告し合う ・日 程 (1)～(5)を3回繰り返す。
【学習の方法】 ・受講のあり方 フィールドワークに向けての計画や, フィールドワークで明らかになったことの整理を積極的に行う。 ・予習のあり方 グループ単位で独自の見通し(仮説)をもって取り組む。 ・復習のあり方 特にフィールドワーク後のギャップ課題整理を明確に行う。
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 ○学生グループの相互評価 ○フィールドワーク受入先の評価 ○教員による評価 } 3 等分 ・方法 ○最終レポート ○教員による観察 ○フィールドワーク受入先へのアンケート
【テキスト】
【参考書】
【科目の位置付け】 専門教育の導入 (教養と専門の間)
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野

全体会記録

総司会者 岡澤 潤次

記録者 森田みゆき

【科目設計 3 : シラバスの完成】

① 教育目標を達成するため

- ・ 評価方法
- ・ 信頼性等を説明して欲しい

A : だだちゃ班 : 理系の中の文化系の科目である

総合的にどれだけ知識を得たか、ペーパーテストで評価
グループワークは統合能力を問う
インターンシップの部分はレポート

D : 出合い班 : 配分方法の説明

講義の目標に関連させ、評価に反映させた。

G : がんばんべー班 : プレゼンテーションの評価法の説明等



第 8 回 教養教育 FD 合宿セミナーパンフレット第2チームの抜粋

F D 合宿セミナーに当たって

山形大学では、平成 13 年度よりこの合宿セミナーを実施し、教養教育の目標や授業の企画、シラバス作成を通して授業のスキル向上を実現するとともに、学部間の人的交流の拡大・充実を図ってまいりました。このような基盤のうえに、今年度より、さらに「授業改善」に焦点化したアドバンスプログラムを実施することになりました。

このセミナーの第一の目的は、「個人個人の教員が教育者としての自己認識の深まりと学生の学びを大切にする授業、および授業改善の方法を具体的なケースを交えて考察・議論し、学生を中心とする教育・授業を発展させること」です。この目的を達成するために、本セミナーでは以下に記す 5 つの参加型ワークショップを行います。これにより、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することにもなります。

また、「ワークショップを共通の題材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が山形大学の教養教育を始めとした教育全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナー終了後には、参加者が教養教育を始めとした大学教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは F D ネットワーク“つばさ”の参加校を始めとして、全国の大学等に開かれています。他機関からの参加者にとりましても、本セミナーで学んだことは自校の教育の発展に活用することができるとともに、参加者がそれぞれの大学等の財産となる、さらにはそれが我が国全体の財産となるという精神でのぞんでいます。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されんことを願っております。



第8回 山形大学教養教育FD合宿セミナー日程表

期 間 第2チーム：8月5日（月）～6日（火）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
12:50	山形大学集合・受付（正門付近）	事 務
13:00	送迎バス 大学出発	
14:00	会場到着・記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：小田
14:20	班作成（アイスブレイクをかねて）	佐 藤
14:40	オリエンテーション	佐 藤
14:50～16:20	プログラムⅠ「自分を知る，自分を語る，他人（同僚・学生）を知る・・・」	佐 藤
16:20～16:30	休憩（10分間）	
16:30～17:30	プログラムⅡ「コーチングとFDと」	佐 藤
17:30	休憩・サプライズ企画	佐 藤
17:45～19:30	夕食（その後お風呂・休憩）	
19:30～20:45	プログラムⅢ「こんなときどうする？—参加型授業を目指して—」	佐 藤
20:45～22:30	懇親会	
22:30	中締め	
23:00	就寝	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅣ「授業力の向上 —わかりやすい授業を実現するために—」	大 島
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅤ「研修のふりかえりとまとめ」	大 島
11:40～	修了式（ポストアンケート）	司会：小田
12:20～	昼食	
13:10	送迎バス 蔵王山寮出発	
15:00頃	山形駅経由 大学到着 解散	

○セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。

○セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。

○食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。

○1日目の入浴時間は設けておりませんので、夕食後～19:30の時間帯で御利用ください。

○起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。

○退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

第8回 山形大学教養教育FD合宿セミナー 班名簿

第2チーム：8月5日（月）～6日（火）

プログラムⅠ・Ⅱ・Ⅲ

DR-A	佐藤 龍子
DR-B	大島 武

A班：窓際班		B班：もぐら班		C班：ストーブ班		D班：11の倍数班		E班：青色素数班	
地教	奥野 誠一	人文	福野 光輝	地教	矢口 友理	人文	山田 浩久	理	脇 克志
工	尾形 健明	工	仁科 辰夫	地教	名子 喜久雄	地教	山岸 あづみ	EM	福島 真司
近畿	浦崎 直浩	愛東	竹越 美奈子	工	上原 拓也	工	原田 知親	鶴専	佐藤 淳
日歯	白瀬 敏臣	信州	松岡 幸司	川看	木村 紀子	関外	並松 善秋	関外	岡澤 潤次
産技	佐藤 司	羽陽	小林 浩子	埼学	古澤 照幸	日歯	小林 さくら子	保医	山下 隆夫
大体	長尾 佳代子	冲国	名嘉座 元一	純真	石橋 孝明	石専	柳 明	長崎	岡田 佳子
読売	松本 美奈							羽陽	田中 ふみ子

E班：4班		F班：長田班		G班：17で割れる班	
医	峯岸 由紀子	地教	伊藤 清郎	人文	齋藤 哲也
工	早田 孝博	農	小川 三四郎	保医	井上 京子
高セ	酒井 俊典	北医	長田 真美	一専	柴田 勝久
仙台	岩田 純	東文	グレドル・イアン	秋県	嶋崎 真仁
岩手	川本 榮三郎	仙台	馬場 宏輝	北教	伊田 勝憲
園田	一新 朋秀	日歯	割田 幸恵	大体	工藤 俊郎

プログラムⅣ・Ⅴ

A 班		B 班		C 班		D 班		E 班	
人文	福野 光輝	地教	名子 喜久雄	人文	山田 浩久	地教	矢口 友理	地教	奥野 誠一
理	脇 克志	農	小川 三四郎	医	峯岸 由紀子	工	原田 友親	工	仁科 辰夫
高セ	酒井 俊典	信州	松岡 幸司	EM	福島 真司	近畿	浦崎 直浩	長崎	岡田 佳子
川看	木村 紀子	北医	長田 真美	一専	柴田 勝久	日歯	小林 さくら子	保医	山下 隆夫
羽陽	田中 ふみ子	園田	一新 朋秀	石専	柳 明	東文	グレドル・イアン	純真	石橋 孝明
埼学	古澤 照幸	産技	佐藤 司	札幌	三須 拓也	大体	工藤 俊郎	北教	伊田 勝憲
関外	並松 善秋			大体	長尾 佳代子			読売	松本 美奈

F 班		G 班		H 班	
人文	齋藤 哲也	地教	山岸 あづみ	地教	伊藤 清郎
工	上原 拓也	工	尾形 健明	工	早田 孝博
愛東	竹越 美奈子	秋県	嶋崎 真仁	羽陽	小林 浩子
保医	井上 京子	日歯	白瀬 敏臣	日歯	割田 幸恵
仙台	岩田 純	仙台	馬場 宏輝	鶴専	佐藤 淳
関外	岡澤 潤次	冲国	名嘉座 元一	岩手	川本 榮三郎

人文：人文学部 地教：地域教育文化学部 理：理学部 医：医学部 工：工学部 農：農学部 高セ：高等教育研究企画センター
 EM：エンrollment・マネジメント室 産技：山形県立産業技術短期大学校 川看：川崎市立看護短期大学 信州：信州大学 近畿：近畿大学
 長崎：長崎大学 愛東：愛知東邦大学 秋県：秋田県立大学 羽陽：羽陽学園短期大学 北医：北海道医療大学 石専：石巻専修大学 埼学：埼玉学園大学
 保医：山形県立保健医療大学 日歯：日本歯科大学 園田：園田学園大学 札幌：札幌大学 東文：東北文化学園大学 純真：純真短期大学
 仙台：仙台大学 鶴専：鶴岡工業高等専門学校 北教：北海道教育大学 冲国：沖繩国際大学 岩手：岩手大学 関外：関西外国語大学
 読売：読売新聞東京本社

班作成 (アイスブレイクをかねて)

受付でお渡しした封筒の中の数字をご覧ください。
数字にはある秘密が隠されています。その秘密を解き明かしてください。
さあ、楽しい班分けです！！

- ◇ 自己紹介はオリエンテーションの後に、ルールをご説明します。
(説明の前に自己紹介しないでね！)

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学生の質の変化への対応

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えることの位置付け
- ② 学生一人ひとりの発達と同様に教員一人ひとりが同僚の力を得て発達することを改めて確認する。
- ③ 教授法について共に考え、スキルアップする。
- ④ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：8班
「プログラムⅠ・Ⅱ・Ⅲ」（1日目）と「プログラムⅣ・Ⅴ」（2日目）で、班構成を替えます。
- ③ プログラムによっては、全体での発表の際に記録をとるための記録係を置く場合があります。また、グループワークにおいて、各班に、司会者、記録係等を置く場合もあります。
- ④ 「③」で記録したものは、各プログラム終了後に提出していただきます（この記録は、こちらでコピーした後、速やかに全班に配付します）。
- ⑥ 最終日に合宿セミナーに関するポストアンケートを実施します。

※プログラムⅠ「自分を知る、自分を語る、他人（同僚・学生）を知る・・・」

プログラムⅡ「コーチングとFDと」は、グループ内でプレゼン、コーチングをしていただきます。プログラムⅢ「こんなときどうする？ー参加型授業を目指してー」は、全体で発表していただきます。

※プログラムⅣ「授業力の向上ーわかりやすい授業を実現するためにー」は、授業スキルについての講義を聴いたうえで、「よりよい授業、わかりやすい授業」をテーマにディスカッションしていただきます。プログラムⅤ「研修のふりかえりとまとめ」は、プログラムⅣの討議結果の発表、及び全体のまとめを行います。

平成 20 年度 第 8 回山形大学教養教育 FD 合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

プログラム I では、自分を知ること、自分を伝えることの難しさと楽しさを体験します。同時に、他人を知ることの難しさ、楽しさも体感していただきます。そしてそれらを通してコミュニケーション力を高めていきます。

自分では、強みだと思っていたところが、別の見方をすると弱みになることがあります。学生も同じです。見方を少し変え、的確なアドバイスをすると弱みが強みに変わる場合もあります。多面的な見方を体感しましょう。

授業は相互作用です。教師が一方向的にがんばっても、学生に伝わらないこともあります。もちろん教師がいつも冷え切った身体と心なら、学生が熱くなるはずはありません。「伝える内容」、「伝える技術」、「伝える心」の 3 つが必要ではないでしょうか。

プログラム II では、コーチングスキルの一部を体験します。Teaching 技術だけでなく、Coaching 技術を学ぶことにより、教えるスタイルの幅が少し広くなると思います。教え込む（外から内へ）だけでなく、引き出す（内から外へ）方法を学びます。コーチングは学生だけでなく同僚にも応用可能です。各学部・部局でコーチングマインドを持って FD を進めると、新たな展開が生まれるかもしれませんね。

プログラム III は、講義科目で参加型授業を考えます。特に学生のモチベーションを高める方法をグループで話し合ってください。班単位で発表もあります。

プログラム IV では、1 日目のプログラムで検討した内容を実現するための基礎となる「授業力の向上」を目指して、講義＋ディスカッションを行います。

プログラム V では、プログラム IV のディスカッション結果を全体発表するほか、本研修全体のまとめを行います。自分のコミュニケーションスタイルは、この研修をとおして他のメンバーにどのように映ったのか、イメージ交換ゲームで体感してください。

プログラム I 「自分を知る、自分を語る、他人（同僚・学生）を知る…」

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| ○ プログラムの講師による作業内容の説明 | 8 分 |
| ○ 考える時間＋記入時間 | 7 分 |
| ○ プレゼン | 1 人 4 分 |
| ○ 質疑 | 2 分（プレゼン＋質疑＝6 分×7 人＝42 分） |
| ○ プレゼンの良かった人は誰？ | 2 分 |
| ○ 評価記入 | 3 分 |
| ○ プログラムの講師による作業内容の説明 | 5 分 |
| ○ 長所・短所記入 | 7 分 |
| ○ ペア作業 | 各自 4 分（×2＝8 分） |
| 全体で | 90 分 |

プログラムⅡ「コーチングとFDと」

- プログラムの講師によるコーチングと作業内容の説明 20分
- 「あなたにとっての最高のチャレンジ」
考える時間+記入時間 8分
ペア作業（ヒーローインタビュー） 16分（8分×2人）
- 質疑応答 10分
全体で 60分

プログラムⅢ「こんなときどうする？－参加型授業を目指して－」

- プログラムの講師による作業内容の説明 8分
- 120人程度の講義で「参加型」を想定して、まず1人でアイデアや実践例を書いてみましょう。（5分）
その後、班で考えてみましょう。 20分
 - 1) 学生と教員の双方向（コミュニケーション）には、どんな可能性・方法があるか。
 - 2) 学生と学生の学び合いにはどんな可能性があるか。
 - 3) 学生と教員と第三者との係わり合いにはどんな可能性があるか。
 - 4) 学生のモチベーション（特に内発的動機）を高めるにはどうしたらいいか。
 - 5) モチベーションを上げる授業内容、方法とはどのようなものがあるか。
- まとめ作業 15分
- プレゼン 3分×8班＝24分
全体で 75分

プログラムⅣ「授業力の向上－わかりやすい授業を実現するために－」

- プログラムの講師による内容の説明 5分
- 「授業力向上のためには－ケーススタディー」（講義） 55分
- 「よりよい授業を目指して－ディスカッション－」 30分
全体で 90分

プログラムⅤ「研修のふりかえりとまとめ」

- プログラムⅤの検討結果のプレゼン 5分×5班 25分
- イメージ交換ゲームの実施 30分
- イメージ交換ゲームのふりかえり 15分
- 研修全体のまとめ－学びをFDに生かしていきましょう－ 20分
全体で 90分

プログラムⅠ「自分を知る，自分を語る，他人（同僚・学生）を知る…」

ここでの課題

プログラムⅠでは，自分を知ること，自分を伝えることの難しさと楽しさを体験します。同時に，他人を知ることの難しさ，楽しさも体感していただきます。そしてそれらを通してコミュニケーション力を高めていきます。

自分では，強みだと思っていたところが，別の見方をすると弱みになることがあります。学生も同じです。見方を少し変え，的確なアドバイスをすると弱みが強みに変わる場合もあります。多面的な見方を体感しましょう。

授業は相互作用です。教師が一方的にがんばっても，学生に伝わらないこともあります。もちろん教師がいつも冷え切った身体と心なら，学生が熱くなるはずはありません。「伝える内容」，「伝える技術」，「伝える心」の3つが必要ではないでしょうか。

- プログラムの講師による作業内容の説明 8分
 - 考える時間＋記入時間 7分
 - プレゼン 1人4分
 - 質疑 2分（プレゼン＋質疑＝6分×7人＝42分）
 - プレゼンの良かった人は誰？ 2分
 - 評価記入 3分
 - プログラムの講師による作業内容の説明 5分
 - 長所・短所記入 7分
 - ペア作業 各自4分（×2＝8分）
- 全体で 90分

プログラムⅡ「コーチングとFDと」

ここでの課題

プログラムⅡでは，コーチングスキルの一部を体験します。Teaching 技術だけでなく，Coaching 技術を学ぶことにより，教えるスタイルの幅が少し広くなると思います。教え込む（外から内へ）だけでなく，引き出す（内から外へ）方法を学びます。コーチングは学生だけでなく同僚にも応用可能です。各学部・部局でコーチングマインドを持ってFDを進めると，新たな展開が生まれるかもしれませんね。

- プログラムの講師によるコーチングと作業内容の説明 20分
 - 「あなたにとっての最高のチャレンジ」
 - 考える時間＋記入時間 8分
 - ペア作業（ヒーローインタビュー） 16分（8分×2人）
 - 質疑応答 10分
- 全体で 60分

プログラムⅢ「こんなときどうする？ー参加型授業を目指してー」

ここでの課題

プログラムⅢは、講義科目で参加型授業を考えます。特に学生のモチベーションを高める方法をグループで話し合ってください。班単位で発表もあります。

- プログラムの講師による作業内容の説明 8分
- 120人程度の講義で「参加型」を想定して、まず1人でアイデアや実践例を書いてみましょう。(5分)
その後、班で考えてみましょう。 20分
 - 1) 学生と教員の双方向(コミュニケーション)には、どんな可能性・方法があるか。
 - 2) 学生と学生の学び合いにはどんな可能性があるか。
 - 3) 学生と教員と第三者との係わり合いにはどんな可能性があるか。
 - 4) 学生のモチベーション(特に内発的動機)を高めるにはどうしたらいいか。
 - 5) モチベーションを上げる授業内容、方法とはどのようなものがあるか。
- まとめ作業 15分
- プレゼン 3分×8班=24分
全体で75分

(資料1を提出)

プログラムⅣ「授業力の向上 ーわかりやすい授業を実現するためにー」

ここでの課題

プログラムⅠ～Ⅲで検討した学生のモチベーション向上、授業への参画を実現するためには、まず教える教員自身に指導力・授業力が求められます。「わかりやすい」「興味の湧く」授業を実現するにはどうしたらいいのか。このセッションでは、授業スキルの向上という基本に立ち返り、講師の体験に基づく講義をベースにディスカッション形式で考えを深めます。

- プログラムの講師による内容の説明 5分
- 「授業力向上のためには ーケーススタディー」 55分
→次頁のレジュメにそった講義
- 「よりよい授業を目指して ーディスカッションー」 30分
→講義内容を踏まえ、よりよい授業を実現するためのポイントを整理する。
→自分の持っている問題点の洗い出しと解決策の模索を行う。
全体で90分

【ケーススタディ ー私の授業法ー】

1. ガイダンスのしかた

- 必ずワンペーパー作って渡す。 ← 最初の 3 週間で徹底

2. 授業の組み立て方

- 90分を3つのパートにわけると ← 話しの構造化
- 時間の使い方を予告し、守ると ← 全体像を見せることが大切
- 「つかみ」が大切（冒頭に力をいれる） ← 終わりはすっきり

3. 効果的な表現技術

- 言語表現の工夫
 - ・「例示」の多用 ← 相手に合った例を挙げる
 - ・「つなぎ言葉」の活用 ← ゆっくり間を取って話す
 - ・「用語」の選択と位置付け ← 新出語に注意
- 非言語表現の効果
 - ・身体表現 ← gesture と posture の使い分け
 - ・対人距離 ← 机間巡視／指導はどこまで有効か
 - ・表情 ← 笑顔が基本（好意の返報性）
 - ・アイコンタクト ← プレッシャーと激励

4. 資料配付と板書

- 教科書の使い方 ← 買わせたら使う／使わないなら買わせない
- レジユメの効果 ← 情報を与えすぎない
- 板書は最高のビジュアル ← 小学校時代からのお約束

5. 双方向性の確保

- 発問のしかた（3つのポイント） ← 大切なのはリズム
- 紙ベースでのやりとり ← e x) 大手前短大「なるほどポイント」

6. 評価のしかた

- 「合わせ技」が基本 ← e x) 出席 10% リスニング 10%
小テスト 40%
プレゼン 20% 解答・提出物 20%
- 主観と客観のバランス ← 学生が納得できる基準を明示する
(妥当性・客観性・効率性)
- 個人情報保護と説明責任 ← 授業期間と終了後で区別

プログラムⅤ「研修のふりかえりとまとめ」

ここでの課題

プログラムⅣで議論、検討したより良い授業を実現するためのポイントについて、各グループに発表していただき、全体での分かち合いを行います。また、2日間の研修を通じて、自分のコミュニケーションスタイルが他人にどんな印象を与えたのか、イメージ交換ゲームを通じてふりかえります。

- プログラムⅤの検討結果のプレゼン 5分×5班 25分
- イメージ交換ゲームの実施 30分
- イメージ交換ゲームのふりかえり 15分
- 研修全体のまとめ ー学びをFDに生かしていきましょうー 20分
全体で90分

各プログラムの記録【第2チーム】

プログラム I 「自分を知る, 自分を語る, 他人を知る」

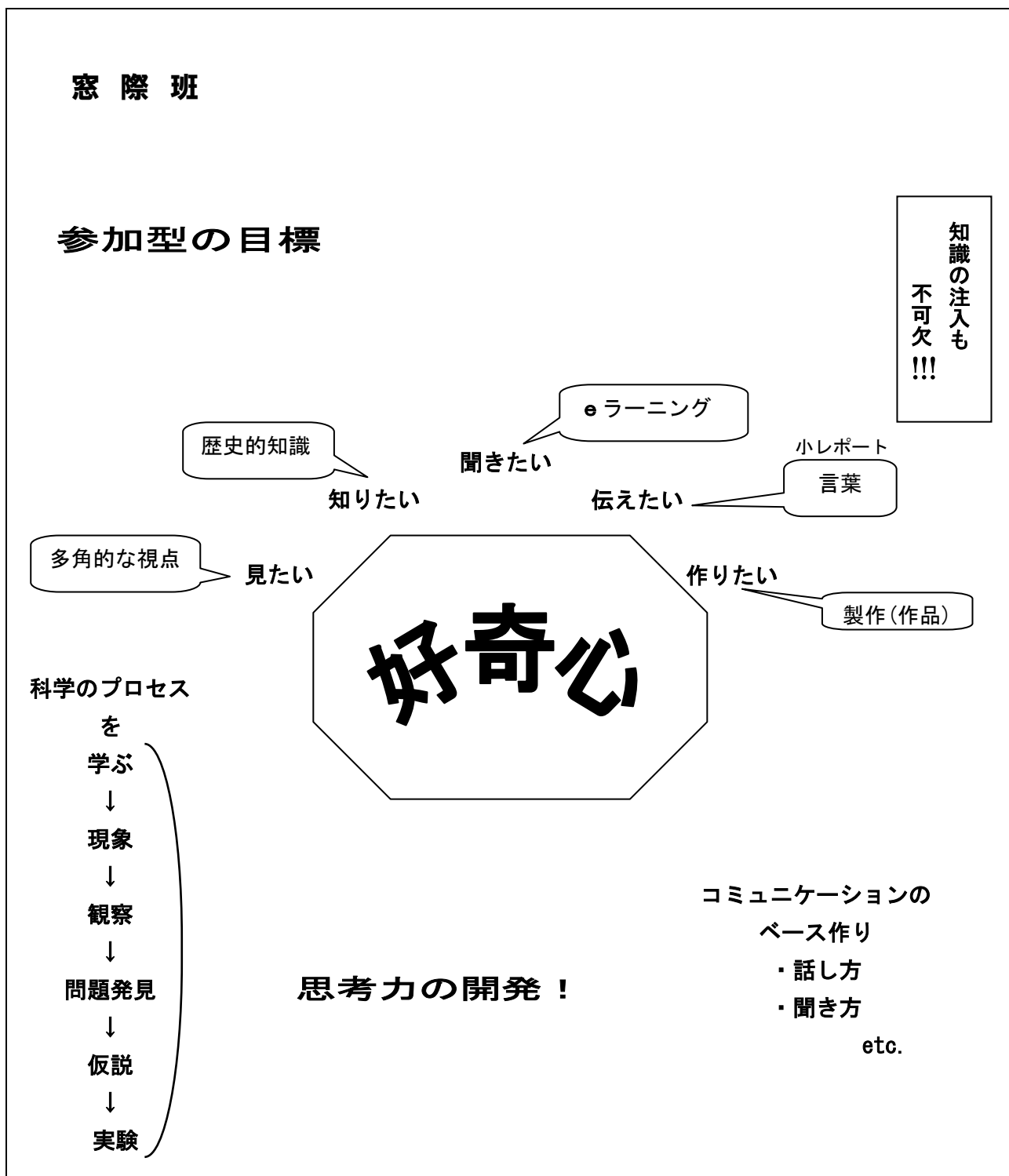


プログラムII 「コーチングとFDと」

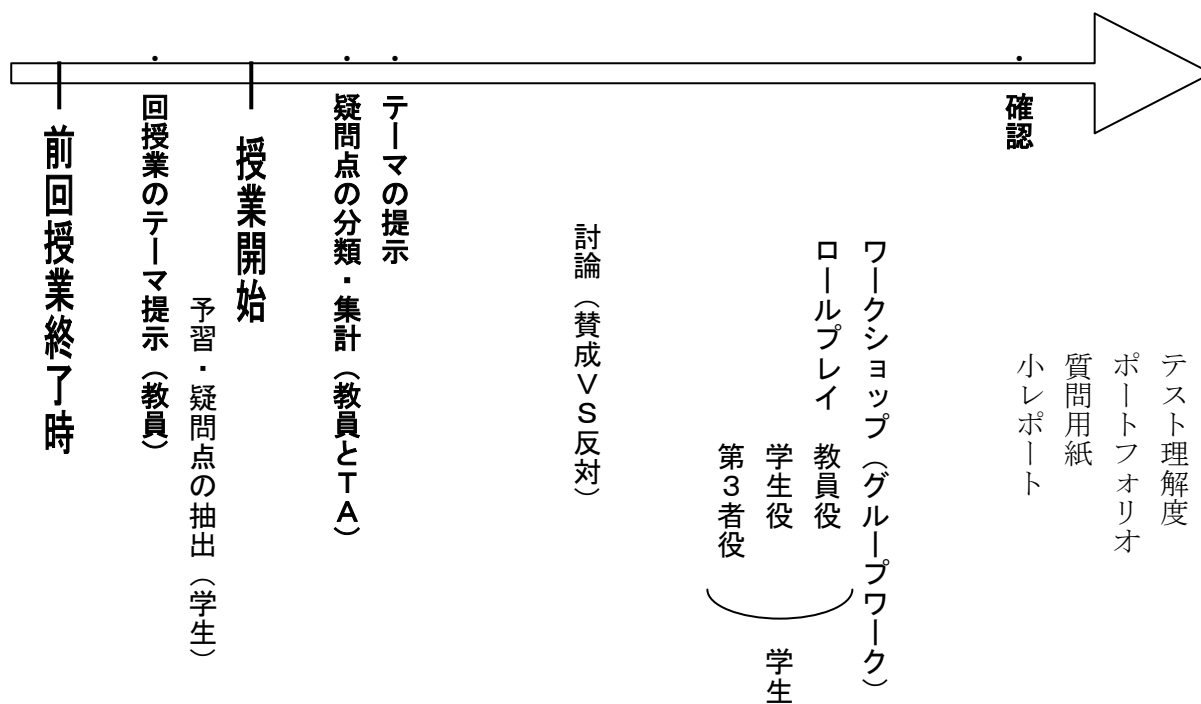


プログラムⅢ 「こんなときどうする」

◆ グループ作業記録



No.8 もぐら 班



スーブ 班

こんな時どうする？ —参加型授業を目指して—

- 講義終了時、質問用紙を配布 → 演習



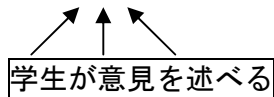
翌週に回答

- 講義中に学生に質問→該当者挙手→その中のひとりに質問し



教員がコメントする ← 他の学生からの意見をきく→回答してもらう

- 授業の中で数回演習を取り入れる

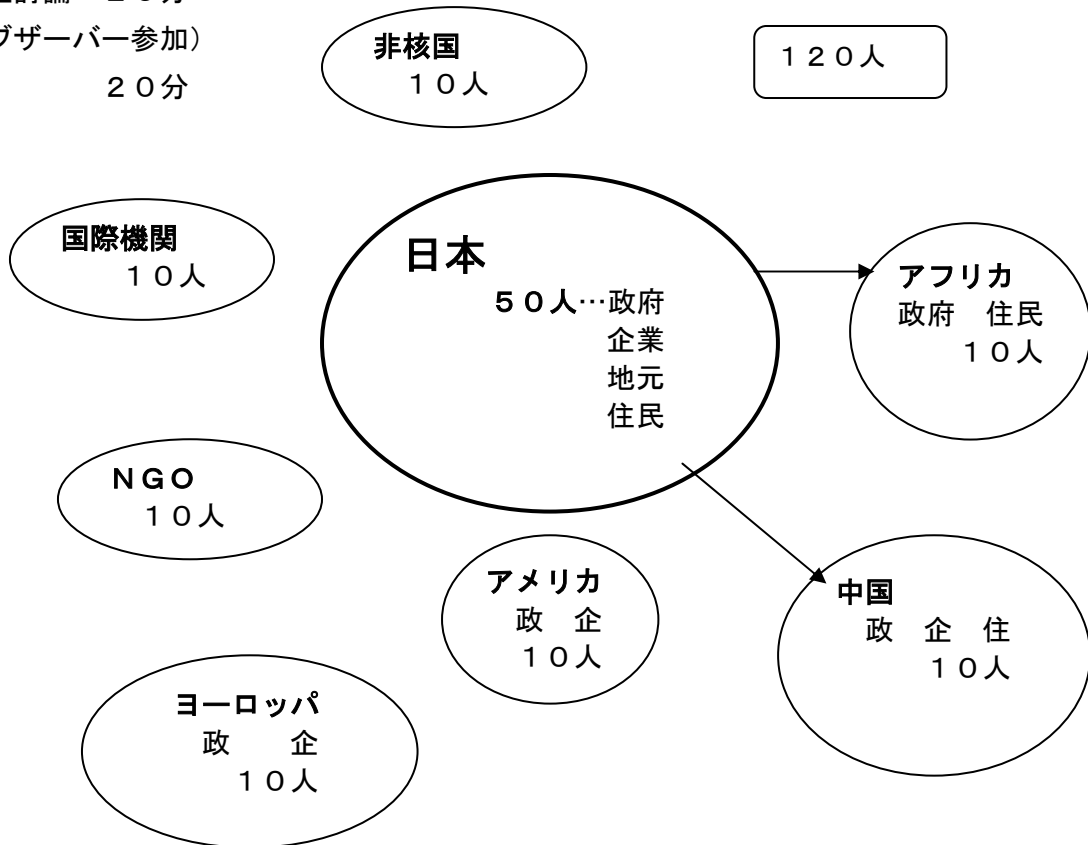


→ 教員が講評する

11の倍数 班

(国際政治学) 高レベル放射性核廃棄物の処理のあり方

導入	20分
班分け	5分
班内討論	20分
班・相互討論	25分
(オブザーバー参加)	
まとめ	20分



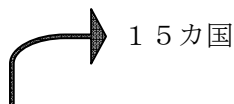
青 色 素 数 班

1、 テーマ 「理想の教育制度探し」

2、 授業計画

- ・ 講義
- ・ グループワーク (国別)に分かれる
調査, ディスカッション, まとめ 8×15
- ・ プレゼンテーション
- ・ SNSを利用したグループワーク
(Social Network Service)
- ・ 全員でSNSを使ってディスカッション
↓
- ・ 全員でりその教育制度を提案
- ・ 個人で最終レポートを提出, Web上で公開

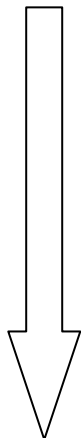
- ・ 相互評価
- ・ 発表 (ランダム)
- ・ まとめ



15カ国

4 班

○ 授業開始時



○ 授業終了時

- ・ 座席指定
- ・ 前回の復習
- ・ 課題提示
- ・ イントロ（講義）
- ・ グループディスカッション 6人程度
（レポート）
- ・ 相互評価
- ・ 発表（ランダム）
- ・ まとめ



長田 班

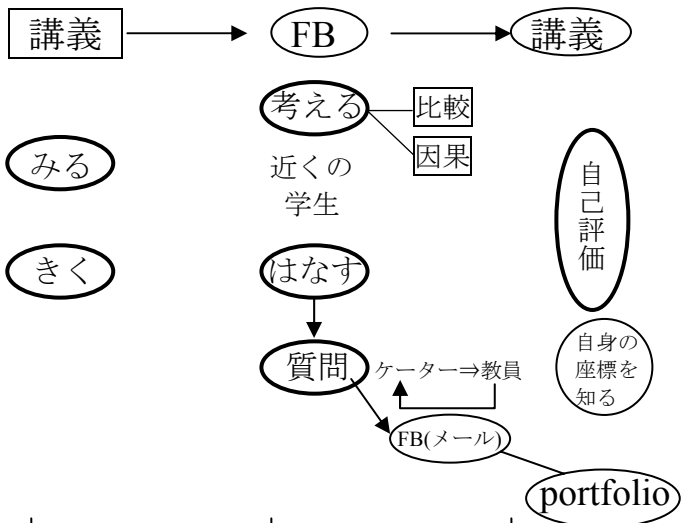
個の学びをサポートするために

課題

(抽象的)
汎用性のあるもの (答えが一つとは限らない)

第三者
社会的意義
社会性
問題意識

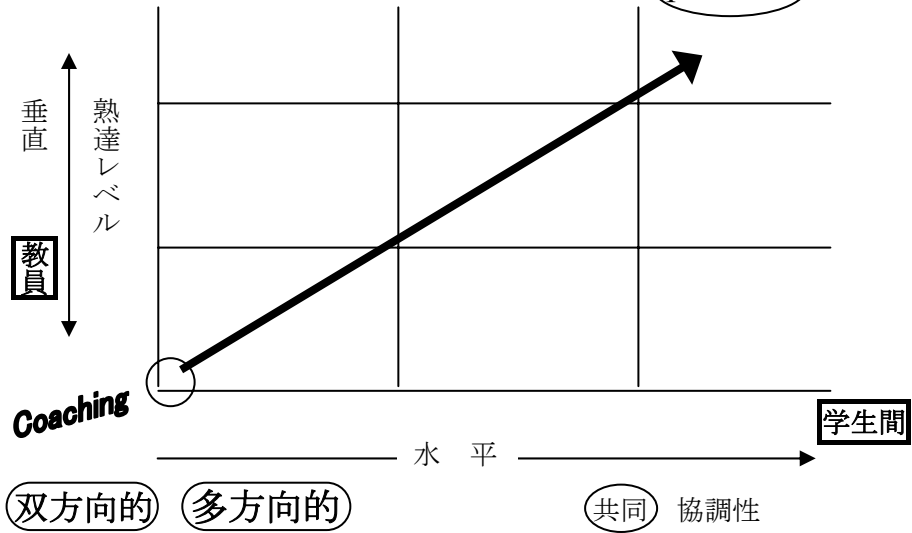
学習過程



motivation ↑
共同性
体験性
実践

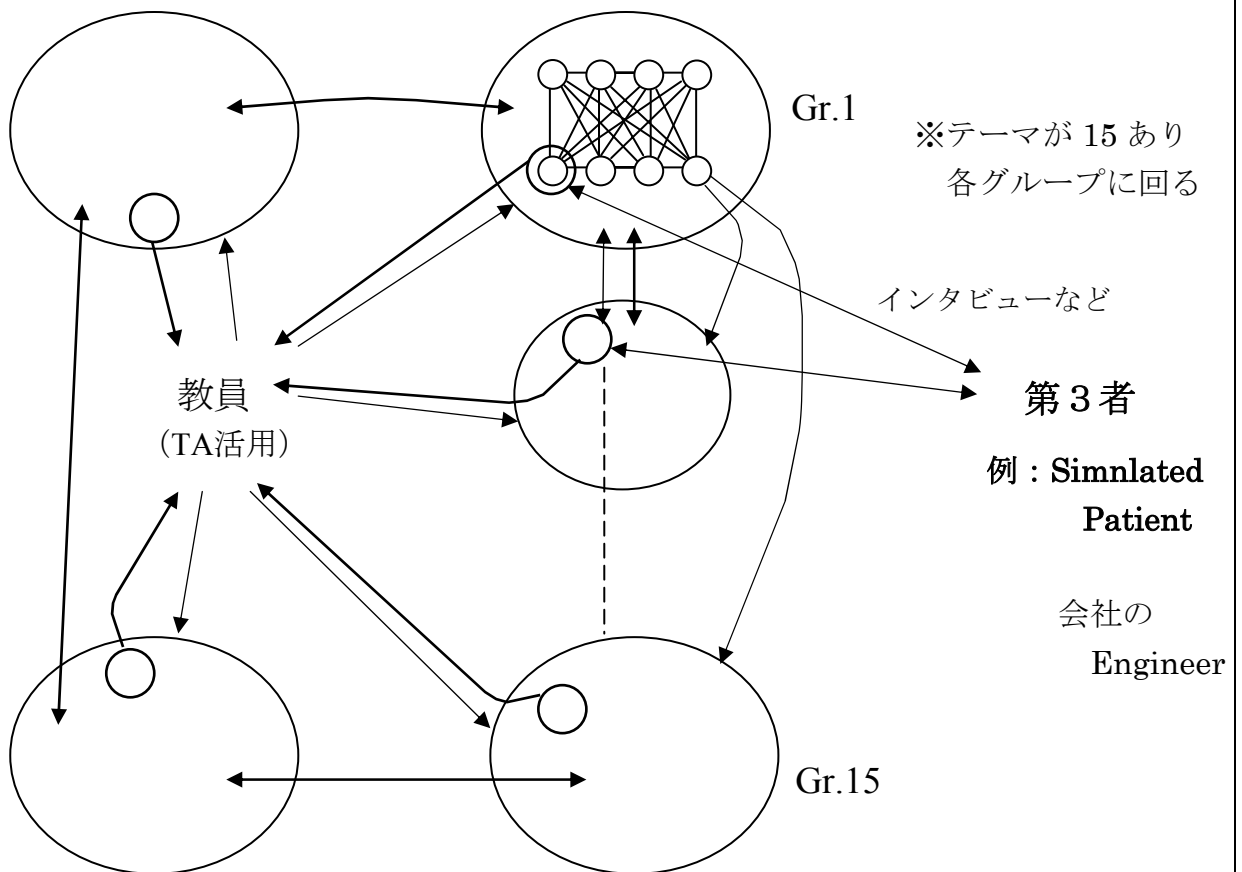
学生の参加

相互作用



17で割れる 班

参加型授業ケース



プログラムⅣ 「授業力の向上」



プログラム V 「研修のふりかえりとまとめ」

◆ グループ作業記録

A 班

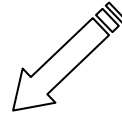
司会者 脇 克志
記録者 木村 紀子
発表者 古澤 輝幸

新人向け：授業の心得—これだけはおさえてほしい—

1. 評価方法の明確化



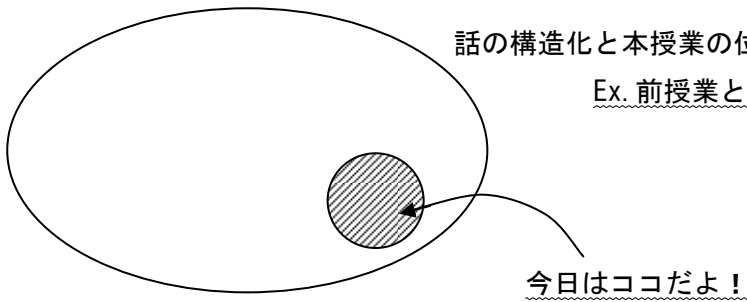
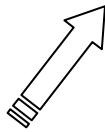
- ・授業の一番最初に学生に伝える。
- ・具体的に何をどのように配点しているか。Ex. 過去問の例示!
- ・授業進行の過程で現在の評価がわかるようにする。



2. ガイダンス

ガイダンスにおいて、上記 1. を周知する。

3. 授業の組み立て方



なぜ、今日、ここで、この話をするのが大切

司会者 松岡 幸司
記録者 小川三四郎
発表者 一新 朋秀

B 班

1. 教員は自作自演者

→学生とのヒューマン・リレーションの確立

2. シラバス（補足篇）を配布

大学・学科の理念，授業目的・到達目標の明示
評価方法（点数配分の明示）

3. 授業の見直しを明確にする

授業運営の時間配分の予告

4. 表現技術を磨く

表情，アイコンタクト，板書

5. 双方向性の授業

発問 { 1. むつかしい質問は×
2. 二択，三択
3. 意見・感想

6. まずはやってみなはれ！

自信をもって



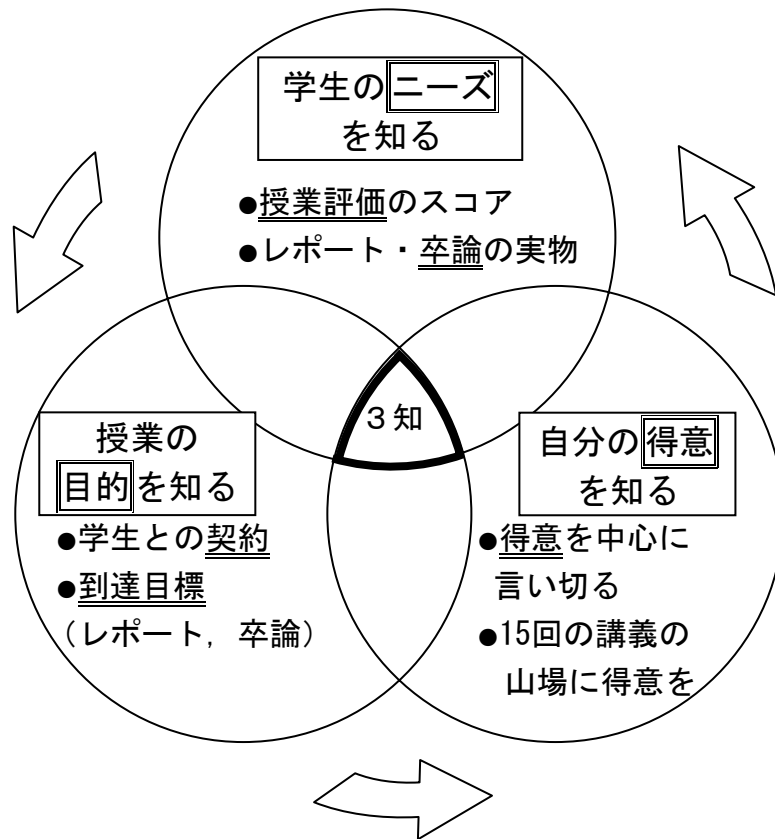
C 班

司会者 全 員
記録者 福島 真司
発表者 山田 浩久

《最重点目標》

新人教員のモチベーション UP↑

『3つの知る』



D 班

司会者

記録者

発表者 小林さくら子

1. 授業の組み立て方

1) 時間の予告

・ 終了時間 ・ やま場

2) 構造化

2. 板書を多用

3. 言語表現

1) 具体例を出す

2) 大切なところのくり返し・強調

4. 発問方法

2 者択一がベスト

はずした時のフォロー？



E 班

司会者 石橋 孝明
記録者 伊田 勝憲
発表者 仁科 辰夫

新人教員向け 授業の心構え

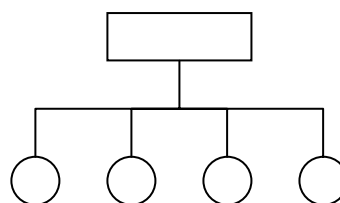
①ワンペーパー [授業のルールづくり]

②学生とのコミュニケーション

- アイコンタクト・表情
- 出席表 (授業への質問・感想)
- 資料

③話の構造化

- 論理構造を伝える



④言葉の意味

- 学生に伝わる言葉で

⑤板書

- 大きくわかりやすく

※PowerPointの使い方

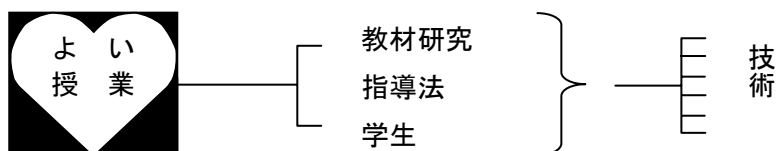


F 班

司会者 竹越美奈子
記録者 岡崎 潤次
発表者 井上 京子

新人(任)教員向け
特に強調して伝えること

1. 先ず 大事な点 授業の構成レジュメを提示
講義レジュメをそのまま活用？
2. 追加ポイント
 - ・名前を覚える（座席指定）
 - ・パワーポイントの使い方
 - ・前回の復習
 - ・メリハリ（全体と各時間）



3. 心掛け
 - ・学生のニーズに対応（迎合ではない）
 - ・学生との信頼関係を作る



G 班

司会者 尾形 健明
記録者 嶋崎 真仁
発表者 嶋崎 真仁

●新人に求める要求

重要な基礎科目 かつ 学生にとって新しい分野
全員合格を目指す
(シラバスの目標を達成できる)



1. カリキュラムの中での担当科目の位置づけ

2. シラバス作成におけるグループ討議

3. 授業法を勉強して実践

特に { 評価法を明確に
理解度の把握

●何故分かり易い授業が必要なのか

●個別内容の整理

●日記・ポートフォリオ,
講義記録, 授業参観

後に影響が出る



Hard 班

司会者

記録者 割田 幸恵

発表者 早田 孝博

新人のみなさんへ

1. 授業の流れを意識！

つかみ・構成・時間厳守

2. プレゼンテーション（声・字・gesture etc.）

早くに自分の特性を意識し改善へ

3. 「客観」評価は重要

説明責任・内実に即して

